は惠れてゐる。だがその父祖よりも彼らが個人的に幸福であるか否かは我らの知るところではない。」と結ぶ。

彼らのいふ「新しき社會」に對するかゝる見解は將に土民社會の歐化を謳歌するものといふべく、而も在來の土民社會の破壞の上に、「新しき社會」を齎した彼らの植民史的事實に本質的に道義感の缺如を見出すならば、かゝる「新しき社會」は當然我らの再檢討を要すべきところであらう。

本書は一九三六年八月より翌年五月に到る著者自からのフイールドワークを基礎として著され、多くの資料を提供する點に於て當地域研究に重要なる寄與をなすものであることは疑ひのないところである。

本書は先に太平洋問題調査會 Institute of Pacific Relations により出版が企圖されてゐたが昭和十七年三月、上海軍報道部の手により上海にて印刷前の原稿を押收され、報道部に於て印刷せられたものである。（和田俊二）

黃土地帶

アンダーソン著
松崎壽和譯

支那史前研究に於て瑞典のJ・G・アンダーソン教授の名は本譯書の原書英譯本"Children of the Yellow Earth"と共に餘りにも著名である。本書は云ふまでもなく一九一四年北京農商部中國地質調査所の鑛政顧問として招聘されて渡支し、一九二五年まで滯在した十年間の「道筋の一里塚の石標には鑛山技師・化石蒐集家・考古學者といふ文字がつぎつぎに銘刻されてゐる」と書き初めてゐる教授の史前支那の自然的人文的踏査記錄であり、發見物語である。

本書は先づ地質・古生物學關係のものからはぢまるが自分に紹介可能な本書の後三分二の部分を簡單に述べて見よう。古生物學者としての教授が周口店洞穴に於いて「北京人類」の遺骨と遺物發見の端緒を開くに至る經過の物語の中には、その調査と研究に多くの學者が如何に心から提携しあつて世界的發見を可能にしたかを教へるものである。この發見端緒を導いた貢獻こそ教授の古生物學者としての一里塚の石標をはつきり銘刻したものでなくてはならない。「仰韶住居址の發見」の章では最初化石蒐集のための踏査に於てはからずも未知の彩陶を發見し、全く不可解な道に迷ひ込みむしろ專攻の地質・古生物學探究に閉ぢこもらうとした教授であつたが、北京に歸來してアナウの報告書によりかゝる土器の支那發見の理由を漸く首肯し得た事情が述べてある。仰韶彩陶文化に併行する沙鍋屯洞穴遺跡の調査となり、遂に彩陶文化の波及經路の問題と關聯して甘肅旅行をなすに至つた。かくて朱家窯遺跡の發見や「洮河流域」の諸遺跡踏査によつて、教授の爾後の餘生は專ら考古學的探究に捧げられることゝなつたのである。次に馬家窯村附近の住居址と併行する墳墓を邊家溝、半山、瓦罐嘴の山頂に發見し、豐富に採集された副葬壺の圖紋に於ける呪術的象徴性を考察してゐる。終章は「仰韶文明」としてオルドス沙漠の舊石器時代遺物と仰韶遺跡との間隙を連ねて遺跡未發見の事實を疑ひ、更に又仰韶期と殷との間隙は將來に推測を待つ可きものとし

て結んでゐる。

以上本書の概要を述べたが他の二石標よりもこれ等は偉大にして華々しきは考古學者としてのそれであり、支那史前文化の研究を彩陶文化に集中せしめた教授の業績が遺憾なくうかゞひ得るのである。而して教授は所謂仰韶文明に原支那文化の淵源を求めながら、殷文化との間隙は如何とも埋める術がなかつたものと思はれる。爾來今日まで教授の見解は根强く存續し來たつたが、右の間隙を埋めたものは國立中央研究院の支那考古學者の手による彩陶文化と異質的な黑陶文化の解明によつてゞあつた。

尙本譯書には各章毎に懇切な譯註があり譯者の良心的努力は察して餘りがある。終に一二氣附いた點を訂正して置かう。二六五頁の譯註に擧げられた彩陶遺跡中「洹河北岸の侯家莊」とあるは勿論「洹河南岸の後岡」である。二九二頁の「アヴェバリー」は Lord Avebury のことで「エーブリー卿」とすべきである。二九九頁の「この住居址で發見された無彩の粗雜な土器の多くは明らかに藷或は毛織片で型取られてゐた」とある一句は不明瞭であるが要するに繩藷文を印した土器のことを云つたものである。(座右寶刊行會刊・定價六圓參拾錢)(澄田正一)

日本考古學研究　　森本六爾著

著者の七周忌記念に編まれた遺稿集で、故人の主宰した『考古學』其他の雜誌單行本などに發表された大小三十餘の論文及未發表の「銅劍銅鉾の研究」を收錄し卷末には略歷及著作目錄が附せられてゐて、其の學問的領域、傾向等をよく示すものである。

卷頭の「手帖」は極く短かいものながら含蓄の深い文章で、自ら襟を正して讀ましむる所があり――熱のある日尙十五年の齡を重ねて見たいと思ふ。――なる句に多くの人の感銘をよぶであらう。

さて著者が生前最も意を用ゐ又得意とした研究對象は青銅器の問題である。よしや我國に青銅器時代を認めようとする、その提唱は破れたとしても、此處に彼の日本古代文化論述の基調が置かれて居ることは注意せらる可きであり。北九州の一角に傳へられた金屬を伴ふ高度文化が「西南より東北へ」とその力强い歩みを日本金島に及ぼしたと云ふ考へは動かないであらう。その典型的な論述は「銅劍銅鉾の研究」に見られるばかりでなく、彌生式系統の文化は勿論、日本古代文化全般を論じた「日本古代生活」にも現はれてゐる。青銅器の分類、編年は此の觀點から行はれ、分布から傳播の狀況も鮮かに解明されてゐる。而して古代文化の流動が巧みに把握されてゐる手際に感服する。たゞし、その間にともすれば見失はれ易い一面のあるのを忘れ得ない。例へば同じ青銅器であり乍ら一方では劍であり鉾であるものが、他の一方に行けば銅鐸となるのは何故であるか、青銅器と共に彌生式の文化が北九州で始まつて居るのに、何故半島と土器がうまくつながらぬのか。此等の問題に就いて觸れる所のないのは物のたりない氣がする。

次に青銅器の問題を彌生式土器と結びつけ、廣く生活樣式の問題迄掘り下げた所に著者の非常な强味がある。右の見地から石庖